

京都大学電子図書館の貴重資料画像について－資料電子化への取組とその提供

後藤慶太（京都大学附属図書館）

1. はじめに

京都大学電子図書館は、ここにアクセスすれば京都大学の森羅万象を知ることができるシステム作りを目指しています。1998年3月から2000年1月までの間に、延べ373,586サイト、1日平均551サイトからアクセスがあり、海外からの利用もその10%を占めています。（アクセス総数10,983,102件、1日平均16,167件）

この電子図書館で提供しているコンテンツの中心が京大で所蔵している国宝をはじめとした古典籍の画像です。

2. 現在提供中の貴重資料画像

現在、電子図書館では以下のような貴重資料の画像を提供しています。これらの画像はインターネットを通じて誰もがいつでも無料で見ることができます。ほとんどが画像のみのデータですが、一部翻刻文を付した資料もあります。

詳細は、<http://ddb.libnet.kulib.kyoto-u.ac.jp/exhibit/index.html> を参照してください。

- ・ 国宝－今昔物語集（鈴鹿本） 553 画像
- ・ 重要文化財－万葉集（尼崎本）、範国記、兵範記など 29 点 7,126 画像
- ・ 貴重書－維新資料、和算資料、富士川本、源氏物語、義経記、天正遣欧使節肖像画など 400 点以上およそ 70,000 画像
- ・ 普通書－保元物語、平治物語など 10 点 849 画像

これらのほか、公開準備中のものや新たに作成発注しているものを含めると今年中には詳細画像で140,000枚を越える画像データベースになる予定です。

3. デジタル化の歴史

このように多くの貴重資料画像を蓄積、公開しているわけですが、ここに至るまでに下記のような過程を経てきました。

- | | |
|--------|--|
| 1994 年 | 展示会「吉田松陰とその同志」にて電子図書館実験システム Ariadne による電子展示を開催。Ariadne は現京大総長である長尾真教授を代表とする電子図書館研究会により開発された実験システムです。 |
| 1995 年 | 図書館ホームページ開設にあたり、その目玉として『國女歌舞妓繪詞』の複製本からスキャンした画像を公開しました。 |
| 1996 年 | 文部省科学研究費補助金により大量のデジタル画像作成を行いました。 |
| 1997 年 | 電子図書館を担当する電子情報掛が作られました。 |
| 1998 年 | 電子図書館システム（富士通株式会社の ilisminds）を導入、本格的な運用を始めました。 |

4. デジタル化の手順

デジタル化する資料の選択は電子情報掛で立案され、最終的に電子図書館専門委員会によって決定されます。電子図書館専門委員会は京大のすべての学部やいくつかの研究所の教官から成る組織です。実際のデータの作成、すなわち原本の撮影から html ファイルの作成についてはすべて業者に発注しています。図書館では完成したデータをサーバに取り込み、メニューからのリンク付けを行います。もちろん、この間にはデータの作成ミスがチェックされ、業者に手直しをさせます。データのチェックは文学研究科の大学院生をアルバイトに雇って行っています。大まかな手順は以下の通りです。

- a. 原本の撮影（光学式カメラにより主に 35mm カラーマイクロフィルムを使います。挿し絵などの美しいものは4×5インチカラーリバーサルフィルム等も使用）

↓

b. スキャニング、保存用マスター画像の作成＝ProPhoto CD16Base（およそ 2,000dpi の解像度でスキャンされています。）



c. インターネット公開用画像（jpeg 形式）の作成－2 サイズ＝ナビゲート用画像（512×768 ピクセル）と詳細画像（1,024×1,536 ピクセル）



d. html ファイルの作成

5. 利用の実態

実際のところそれぞれの利用者がこれらの画像をどのようにお使いになっているかはわかりません。日本文学の先生の中にはプリントアウトをして授業の教材として使っておられるという方もいらっしゃるようです。しかし意外であったのは－これはいただいたメールやアクセスログを見る限りでの判断なのですが－研究者以外の方々からのアクセスが多かったということです。しかも貴重資料画像はその多くが日本の古典文学や歴史資料です。これらに対する需要がこれほどあるとは思いませんでした。

おそらくほとんどの人が個人の楽しみや研究のために利用されているのでしょう。画像をダウンロードして、それを無断で CD-ROM に焼き付けて売るなんていうことをしている人は今のところありません。

6. 今後は？

これからも予算の許す限り、貴重資料のデジタル化は続けていく予定です。

今はただ画像を順番に見ていくだけにしか過ぎません。今後どのような付加価値を付けていったらいいのでしょうか。一部、翻刻文が付されたデータもありますが、同様にして翻刻文、あるいは現代語訳まで付けていくべきでしょうか。一般の利用者はそれを望んでいるようですが、研究者は画像だけで十分だと言います。

また巻物のような資料も今はぶつ切りにして見せていますが、やはり巻物は巻物らしい体裁で見える方がいいのではないのでしょうか。「たま藻のまへ」を実験的に卷子形式で作成したものを公開しています。

さらに、コピーライト表示をどうするかという点も考えなければなりません。今は画像をどんどん作り、どんどん公開しています。そしてそのことに対しては自信と誇りを持ってやっています。しかし、その画像の不正利用に対して具体的で有効な方策をとる責任があるでしょう。現在のところ画像の下部に「Kyoto University Library」と表示しているのみですが、電子透かしを埋め込むための調査検討を進めているところです。

7. さいごに

貴重資料をデジタル化し、インターネットを通じて発信するということは保存と公開という相矛盾する概念を同時に満たすために有効な手段だと考えられます。しかし、公開することによって貴重資料の現物を閲覧したいという要求は以前より明らかに増えてきています。どうしたらいいのでしょうか。実際に利用することができないような資料だったら博物館にでも移してしまえという意見もあります。一方、私たちには先人から受け継いだものをできる限りそのままの形で後世に伝えていく義務もあると思います。悩ましい問題です。

ところで私は先ほど、多くの資料をデジタル化し公開していることには自信と誇りを持ってやっていると申しました。しかし一方で、本当にこのようなものが役に立つのか、これだけ膨大な費用をかける意味があるのか、という疑問は常について回っています。海外の日本研究者も本当に欲しいのは新鮮な最新の論文や資料ではないのでしょうか。ぜひみなさんのご意見を参考にお聞かせください。

ありがとうございました。